

マルブランシュの「叡知的延長」即ち「延長の観念」と、トマスの「第一質料のアイデア」

依田義右

I

マルブランシュは、諸観念の在り処が、神の内以外には考えられないことを証明し、この神のうちにあって全ての事物を表現するものとしての諸観念を、後に「叡知的延長」(*l'étendue intelligible*)として展開した。ところでこの「叡知的延長」なる用語は、「延長」ということばがデカルト主義の用語であることでも明らかのように、決して出鱈目に捏造されたのではない。マルブランシュは、この「叡知的延長」なる用語をアウグスティヌスの *res intelligibilis* から着想を得たとはっきり証言している⁽¹⁾。これは、明らかに、本来の意味で明晰且判明に認識される、即ち人間の唯一の認識対象である *res intelligibilis* と、我々が全く認識できない *res extensa* と、ぼんやりとしか即ち内感 (*sentiments intérieurs*) でしか認識できない *res cogitans* との関係で採用されたのである。アウグスティヌスともデカルトとも大分異なる。このように一見行き当たりばったりに用いられるようにみえる叡知的延長という用語にも厳密な典拠があるとすれば、マルブランシュが、これと同じ意味で常に用いる「延長の観念」(*l'idée de l'étendue*) 即ち「物質の観念」(*l'idée de la matière*)⁽²⁾も、やはり、なんらかの典拠を有しているのではないか。この用語をみて気付かれることは、それが、外見上トマス・アキナスの「第一質料のアイデア」(*idea materiae primae*)に類似していることである。これに少なくともその「着想」をマルブランシュが得たということは、果してありうるであろうか。我々は、その可能性の有無について少し検討していこうと思う。しかし、勿論、一見ただけで分ることであるが、物質 (*matière*) と、軽率には到底語りえない程難解な純粋な可能態たる第一質料 (*materia prima*) とは異なるし、ましてや物質と、形相 (*for-*

マルブランシュの「観知的延長」即ち「延長の観念」と、トマスの「第一質料のアイデア」 139 ma) と決して切り離すことができない質料 (materia) とは全く異なる。それゆえ、我々は、延長の「観念」と、質料の「アイデア」との比較検討を進めねばならないことになる。そうすると、マルブランシュの「観念」の方が文字通りに明晰判明でない。そこで我々は差し当り、彼の観知的延長即ち延長の観念の意義とその提唱過程をみておくことにしよう。

II

「観知的延長」とはいかなるものかについて様々な見方がある。しかしその狙いが、近世の機械的自然観世界観を支える数学的自然学の基礎とりわけ *mathesis universalis* の構築とその神の内での保存にあることは明らかである。かくして、神のうちに創造された万物の数学的幾何学的根拠が観知的延長として存在する。例えば、輝く太陽は、よくよく観測すると、きわめて複雑なものようであるが、実は、これはその根拠を神のうちに、幾何学的図形の代数的処理のような具合に、いわば数式の形で有する。換言すれば、太陽という形象即ち「丸さ」ないし円を代数的に霊化する仕方で神のうちにある。決して神のうちに円があるのではない。ましてやこの世を写す鏡のように、太陽になるように定められている観知的太陽などが神の内にあるのではない。⁽³⁾ また神のうちに太陽の原型として円が置いてあるわけではない。観測するとみられるプロミネンスや黒点などのものは、もはや認識の次元ではなく創造の次元の問題である。摂理の第一法則は、真原因を神とし機会因を物体間の衝突 (choc) としてはたらし、この衝突が Bergson の四つ辻の風のごとく、万物を多岐複雑化するのである。単純な仕方で働く神は、その本性が単純単一であることを示している。神のうちに複雑多岐をもちこんではならない。かくして、観知的延長は、例えば太陽の観念でもあることになる。それゆえ観知的延長は「延長の観念」としばしばいわれる。ともかく、延長の観念は、「汲み尽せざる幾何学的諸真理の基礎」⁽⁴⁾なのである。しかし観知的延長は、ただ一つであり単一である。それ故にこそ神内にありうる。しかし、延長又は空間の幾何学的真理、代数的表現等等と深入りしすぎることは危険である。なるほど、かの大アルノーとの論争において、両者とも大数学者であるので、もしマルブランシュが、形象の代数的処理のみを観知的延長に考えていたならば、両者の論争中の原稿は、数式や符号で埋め尽さ

⁽⁵⁾
 れていただろう。だから、やはりキリスト教的創造を説明するものとしての側面にも注目しておくべきであろう。つまり延長の観念は、御言 (Verbe Divin) と同じ性格を有している。この観念は、御言のうちに、⁽⁶⁾ 諸々の物体の原型として含まれて⁽⁷⁾ いる。それ故 Henri Gouhier が注意するように、神は、自らの御言を産み出すとき、延長の観念を産み出したのであり、またこの観念は、三位の発出とともに現われたのであって、決して被造物たるこの世界の発出とともに現われたのではないのである。この観念は創造を実現する根拠である。さて以上のことを十分に念頭におきながら、我々はマルブランシュの観念説の展開を追ってゆくことにしよう。

III

マルブランシュもはじめはデカルトの観念説にならって、観念を定義して、「凡そ精神が直接に知覚する一切」⁽⁹⁾と、即ち精神ないし思惟のうちにある一切と考えていた。しかし後に、⁽¹⁰⁾「観念」の定義は変わってくる。つまり、「精神が直接に知覚する一切」に、「諸感覚」(sentiments)と「諸観念」(idées)とを区別するに至る。前者は、快苦熱色等々即ち精神の在り方 (manière d'être) 即ち精神の変様 (modifications) 又は様相 (modalités) であり、感覚 (sentiments) 又は内感 (sentiments intérieurs) による認識の対象であり、後者の「諸観念」による認識の対象は、数、延長、幾何学的形象 (figure) 及び諸形象間の関係である。そして、Vision en Dieu を唱えるとき諸観念の在り処は、神の内以外にないことが証明された。とくに生得観念説は否定された。そしてこの説明に置換された「神において一切のものを見る」(Que nous voyons toutes choses en Dieu) とは、「精神は、神のうちに在って、創造された諸々の存在を表現するところのものを見ることができる」ということである。この「表現するところのもの」こそが「⁽¹¹⁾観知的延長」即ち「延長の観念」である。このような用語を駆使しなければならなかったのは、或る識者がマルブランシュに問うたことによる。すなわち、我々が一切のものを神のうちに見るならば、地平線上の太陽の大きさと頭上のそれとが異なることから、観知的世界の不変不動性にふさわしくない、観知的太陽を見ていないことになる、というものであった。マルブランシュは答える。太陽になるように定められている観知的太陽などない。円い形をして神のうちにあるのではない。鏡に写ったように神のうちにあるの

ではない。観知的延長は鏡のように考えてはならない。また「その上に人が形象を描く無際限な黒板⁽¹²⁾」のごとく考えてはならない。幾何学的「円」というよりもむしろいわば円の代数式の形で神のうちにあるのである。では、複雑な有機体例えば眼前に咲き誇る桜や梅の樹木などはどう説明されるのであろうか。これらの点をもう少し明らかにしなければならない。

IV

さて、創造の次元で見ると、なにか物質的なものが創造された。この「創造された」(crée) 延長即ち物質は、いかにして個別化したか。カルテジアンとしてマルブランシュはいう。物質の部分ないしは粒子相互間の衝突 (choc) によって個別化する。しかし機会原因論では、この「衝突」は機会因 (cause occasionnelle) に、即ち自然因 (cause naturelle) にすぎず、真原因たる神は、この二次的創造の責任をやや免れている。ただしこれも神の定めた摂理の第一の法則に組み込まれている。ともかくこのような個別化によって神は延長だけで驚嘆すべき複雑且多岐なものを作る。しかし神の単一性を損わぬのも、神の単純な仕方での働きを損わぬのも、機会因に複雑多岐化の責任をかぶせられるからであろう。

しかし、認識の次元でいうと、実はこの「創造された延長 (物質)」を我々は全く認識できない。精神が物質と交渉をもてるはずがないからである。我々が認識できるただ一つのは観知的延長だけである。ではどうして我々は、机や椅子、さまざまな樹木等々を認識しうるのか。つまり、マルブランシュは、観知的延長の部分は、「全て同じ本性 (nature) であるので、それらの部分は、すべてたとえどんな物体であろうと表現しうる⁽¹³⁾」というけれども、ではどうしてあれやこれやのものが認識できるのであろうか。即ち延長の観念がこのように「一般的であり、つねに同一である⁽¹⁴⁾」ならば、認識論的に個別化の根源はどこにあるのかが問題になる。個別化の根源は一つではないところが興味深い。⁽¹⁵⁾

V

第一に、延長の観念を、我々が眼を閉じ、脳になんらのイマージュを残さずに考えるとき、この観念は、精神 (âme) を純粋な知覚 (pure perception) でもって触

発する (affecter) ののである。のちにカントが *affizieren* を用いていたのを想起させる。この観念は、それがあがままに、つまり無量無辺 (immense), 必然的, 永遠的にみえる。この観念は、精神に至る所万遍なくほんのわずかに抵触 (toucher) する。このために、この観念は、実在しないだとか、その永遠無限なるをもって、物質もそうだとかいったような誤りを犯す。このように、本質又は純粹に可能的なもの、即ち延長の観念のいわば諸観念化の問題のとき、即ち精神が「理解」(concevoir) するとき、マルブランシュは、延長の観念を「大理石の塊」(bloc de marbre)⁽¹⁶⁾ に喩える。これを鑿で「彫る」(tailler) 彫刻家 (sculpteur) は神だが、又同時にこの大理石を我々も彫る。この観念は、神の認識の対象であると同時に、我々の認識の唯一の対象でもある。ただ神は自己認識だけでいわば彫るが、全く受動的な悟性をもつ我々では、幾何学的諸真理の源泉である延長の観念を理解することによって、全ての事物が幾何学的にいわば透けてみえてくるまでをいうのである。もっとも、現実には「闇」⁽¹⁷⁾ (ténèbres) でしかない精神の変様たる色・快・苦・冷・熱・香・音等々が邪魔をしていわばこれらに躓いて「真理」を把えるためのかの「注・意」という努力をしにくくしているのである。彫られた像が個々の観念にあたる。つまり、諸々の観念は無限な、延長の観念の諸限界 (limitations)⁽¹⁸⁾ である。即ち諸々の観念とは、神による「我々の精神への観知的延長の種々の適用」(applications)⁽¹⁹⁾ なのである。この「適用」に我々人間の側で対峙するものは、我々人間にみとめられた唯一の自由たる「注・意」であり、これによって延長の観念は、諸々の観念になる。つまり我々の精神の側で、あれやこれやを考えうる。この「注・意」(attention) とは、摂理の第三法則即ち神たる理性と人間の精神を結びつける法則の機会因として神によって制定されている。それゆえ「われ思う」(je pense) ことができることさえこの法則のお蔭である。このように、延長の観念は、「絶えず精神のうちにはたらきかける (agir)」⁽²⁰⁾ 即ち精神を「照らす」(éclairer) ののである。この観念は、「抵触」(toucher) し「触発」(affecter) するのである。「照らす」とは具体的には、この観念が、「果作動的」(efficace) ということ即ち精神を現実的に「変様する」(modifier) ということである。勿論真にはたらきかけるのは神である。

VI

第二の仕方はどうか。マルブランシュのよく挙げる事例であるが、野原の中央で眼をぱっと開ける場合を考えてみよう。すると、その途端延長の観念は可感的となる。それは摂理の第二法則である身心結合の法則による。真原因は神であるが機会因は物体の現前又は物心の変様である。延長の観念は、精神をかの特知覚で触発するよりもっと活発に抵触する。それ故、延長の観念の実在性は、第一の仕方より多く気付かれる。この観念即ち観知的延長は、観知的な種々の部分に応じて、さまざまに、ここではこの色かしこではかの色で我々を抵触する。というのも、さまざまな色は、延長の観念によって精神のうちに引き起こされた精神のさまざまな可感的知覚 (perceptions sensibles) 即ち変様でしかないからである。そのようにこの観念が色で我々を抵触するのを、我々は日常「物体を見る」(voir les corps) というのである。というのも、物体は不可視的であるから、即ち我々は物体をそれ自身で (les corps en eux-mêmes) 見ないからである。ともかく、延長の観念は、これらの色によって、我々の精神を身心結合の法則に従って触発する。⁽²¹⁾マルブランシュでは、トマスと異なり、色は物体の表面には存在せず、精神の変様として我々の側にある。それ故、「我々は、色によってしか物体を見ない。我々が物体を見るとき、これら物体のさまざまな本性を、色の相違によってしか区別しえない」とまでいわれる。このことを、マルブランシュは、画家の比喩をもちいて説明する。延長の観念を、画布 (toile) に喩え、神を画家 (Peintre) に喩える。⁽²²⁾しかし「塗る」(appliquer) のは、我々ではなくて帰すところ神である。我々は無力である。曇りガラスの彼方の陰は人か物が判別する力などもたぬ。延長の観念のみが認識の唯一真なる対象であり、かの「注・意」という自由のみがある。このように、可能的なものではなくて、現に創造された物体又は延長を精神が「見る」(voir) 場合が説明される。そして、さらには、物体の「運動 (動き)」(mouvement) についてさえ、⁽²³⁾延長の観念で説明が試みられるのである。⁽²⁴⁾

VII

第三に、精神が「感覚する」(sentir) というときはどうか。誰かが、例えば、我々の手に触れるときとか、我々の手が、やけどしたり、刺されたり、くすぐられた

りするとき、その時、この観知的延長は、いわば苦痛となったり快となったりする。この観念は、我々に、我々を対象と緊密に結びつけるためよりも我々に対象を識別させるために与えられたあの「色」によってよりもはるかに活発に精神を触突する⁽²⁵⁾ (frapper) ののである。ともかく、この「触突」によって、苦痛が我々に属することを疑いえないのである。⁽²⁶⁾

さて、以上の、延長の観念の個別化の三つの仕方を今顧みるとき、延長の観念が一なる神の思惟内容に多数の観念ないし観知的なものをみとめるという、トマスもそのアイデアにおいて苦勞した、アポリアーに対する一つの解決であったことは明らかである。

VIII

ところで、マルブランシュの観念の論は、アルノーとの論争を回って展開される。デカルトに倣って、アルノーは、物体を、悟性ないし広く解して知性 (intelligence) がとらえると「延長」にみえてくるわけであるから、ふつうにいう「延長」は、もうそれだけでいわば「知性認識されうる」(intelligible) 延長ではないかと皮肉る。マルブランシュは、勿論、延長即ち物質は、それ自身では不可視的であると答える。しかしアルノーが真に言わんとすることはかなり根深い問題である。アルノーにとって、「観念」(idées) とは、精神の「変様」(modifications) に他ならない。精神の変様は、それだけで本質的に何かを表現して (essentiellement représentatives) いる。精神の変様たる「知覚 (perceptions) と観念とは同じもの」⁽²⁷⁾ なのである。それゆえ、アルノーは、諸観念を我々から独立した「諸存在」(êtres) とみることを容認できない。諸観念は神の内にある筈がないとするのである。

アルノーは、およそ以下のように考えていると思われる。知覚たとえば視覚を例にとりあげてみよう。或る時ここまた或る時あそこをみるとき、それぞれの網膜上にペルスペクティブ (perspective) 即ち映像が映る。このペルスペクティブは、トマスのアイデアの説では species qua (id quo) intelligitur に対応するであろう。つまり精神の知覚 (perceptions) ないし変様 (modifications) が〈id quo〉にあたる。しかし、同時に、この知覚たる網膜上のペルスペクティブに、事物は「本質的」に表現されているではないか。例えば、網膜上に映っている机なら机は、机以外の何

ものも表現していない。まさしく「机というもの・机そのもの」を表現している。つまりまさに「机」という、トマスのアイデア説でいうと、「認識されているもの」(id quod intelligitur) に対応する机の概念内容が示されて余りある。これが、「観念」(idées) とよばれて不都合な筈がない。それゆえ、知覚された「机」は、それ自身「机というもの」を表現している。それは精神の変様であり、観念であるといってもさしつかえない。にもかかわらず、マルブランシュは、この〈id quod〉を、わざわざ、我々から独立した存在として知覚の外におまけに神の内にもっていき、まことに笑止千万である。マルブランシュの言うような諸観念は、「対象を表現している諸存在」⁽²⁸⁾ (êtres représentatifs des objets) とよぶべきであるが、しかしこれは、「知覚 (perceptions) と解された観念から、実在的に区別されたと勝手に思い込んで⁽²⁹⁾いる諸存在」⁽³⁰⁾ であり、「余分な実在有」(entités superflues) である。それどころか、これこそまさに「偽観念」⁽³¹⁾ (fausses idées) とよぶにふさわしい、否それのみかそれらは「幻想」⁽³²⁾ (chimère) にすぎない。このようにアルノーはマルブランシュを難じた。

IX

マルブランシュは、たしかに、観念の存在の証明として「抵抗」(résistance) をうち出す。「この床が君の足に抵抗する」⁽³³⁾ ごとき仕方で示される。例えば、我々の精神が、一つの円のうちに異なる二直径を見出そうとするならば、円の観念は、「君の精神に抵抗する」⁽³⁴⁾ のである。しかしこのような観念の実在性を示す論拠も、観念が「神のうちに」実在することを証しはしない。そこでマルブランシュは、アウグスティヌスを曲解に近いほど独自にとり込んで答えてゆく。我々の精神を照らすのは、我々より上位のものでなければならない。物体や闇でしかない精神の変様が、我々を照らしはしない。帰するところ神が我々の精神を照らすのである。我々を「照らす」とは、カルテジアンでもあるマルブランシュにとって精神を「変様」するということである。ともかく、「アウグスティヌスにおいて私はみてとった。延長の観念即ち観知的延長は神のうちにしか見出されないということ⁽³⁵⁾を」という裏づけがあるので、アルノーに答えるとき、「知覚は対象を表現するものではない」⁽³⁶⁾ し、「諸対象を表現する諸観念は、我々の精神の変様と全く異なる」⁽³⁷⁾ と強調しうるので

ある。

そして、『<第三の手紙>への解答⁽³⁸⁾』で、マルブランシュは、アルノーが、彼の『第三の手紙』で批判していることに答えている。アルノーの批判とは、次のごとくである。「我々の精神の変様たる我々の知覚 (perceptions) は、それらの知覚の対象 (objets) を表現しているということを示すことは、私にとってそれほど困難ではない。我々は、我々が何かを思惟しないということは考えられない。ないもの (rien) を思惟することは、全く思惟しないことである。すなわち自らの対象をもたぬような思惟は存在しない⁽³⁹⁾」と。これに、次のごとく答えている。「対象」(objet) のとり方によって観念の意味が変わってくる。「思惟の対象」(l'objet de la pensée) を、「思惟の直接且直かの対象」(son objet immédiat et direct) と、即ち哲学者たち (Philosophes) がふつうにいう「観念」(idées) ととるならば、確かに「対象」をもたないような思惟はない。しかし、「思惟の対象」が、「観念が表現している外の対象 (l'objet extérieur) と解されるならば、対象をもたない無数の思惟があるであろう⁽⁴⁰⁾」では、「外の対象」とは何か。それは、現実には存在しないところの「可能的諸存在」(des êtres possibles) のことである。マルブランシュの例では、「平らな太陽」「立方体の地球」「黄金でできた山」「幾何学者の対象とする円」等々である。たとえ、この世界が創造されなかったとしても、我々の精神さえ創造されていれば、我々は延長の観念を観る。それは、神がそう欲するからである。「神もこの世界を創る前にこの世界をみていた。又無限に多くの他の可能的世界をみていた。しかしだからといって、神は、何も思惟しなかったとはいえないのである⁽⁴²⁾」マルブランシュの観念の存在論拠は、こういった、神内にあって、いまだ創造されず、将来も創造されないものの存在である。延長の観念と可能的な諸々の世界の観念とは結局は同じことである。このことは、神はその本質を表わす単純且一般的な仕方 (la voie simple et générale) ではたらいて、「可能的な諸々の世界」(Mondes possibles) から選んで、「我々が現在住んでいる世界よりももっと完全な或る一つの世界 (un Monde) を作ることができた⁽⁴³⁾」とマルブランシュが語っているのと無関係ではあるまい。

アルノーの今一つの批判は、マルブランシュが神のうちに延長をもち込んだというものである。つまり「延長の観念」をみとめないからそういう批判となる。アルノーにとって、「延長の観念」は「延長」に他ならないのである。それゆえ、彼は、マルブランシュはスピノザ主義者であると批難する。アルノーは攻撃する。「神が自ら自身のうちに全てのものを見るということから、神のうちに延長や蚊 (moucheron) や蚤 (puces) やひきがえる (crapaux) が存するとするのは、無茶な理屈⁽⁴⁴⁾である。」と。しかしこの神の物質化批判は、観念の論の相違が解消されていない以上穏当とは思われない。もっとも、我々が、スピノザの『エチカ』をよむとき、そこにマルブランシュの思想と同じもの⁽⁴⁵⁾を見出す。しかしマルブランシュ自身は、「スピノザははじめにも、創造が不可能であると判断した⁽⁴⁶⁾」と本来のキリスト教の立場を貫こうとしている。しかし、その意図は十分達成されてはいない。しかしながら、ともかく、延長の観念は、単に神の実体であるのではなくて、物的被造物によって分有されうる限りにおける神の実体⁽⁴⁷⁾である。神は延長の観念を有している。しかしそれは、神が延長を作りたいと欲したからである。「神は、その驚嘆すべき作品を作るためにしか物質を作らなかった⁽⁴⁸⁾。」そして創造された延長だけで、神は驚嘆すべきものを作ったのである。⁽⁴⁹⁾

XI

このように、マルブランシュが延長の観念というとき主として創造のことが考えられている。いわゆる「生成の根源」(principium generationis) に対応するものである。延長の観念は神の実体かと問われたとき、マルブランシュは、トマスの『スンマ』第一部第15問第2項の引用を指示しながら答えている。「私は、聖トマスにおいて、次のことをみてとった。即ち延長の観念は、創造された延長によって、不完全な仕方でも模倣され且分有されうる限りでの神の本質であること⁽⁵⁰⁾を。」と。まさに Ollé-Laprune もいうように、これはトマスの権威の「横取り」⁽⁵¹⁾(s'en emparer) である。それはともかく、かくして、延長の観念が、いわゆる「認識の根源」(principium cognitionis) であるとともに、「生成の根源」たることが確認される。それゆえ、延長の観念は、「神が延長について有する観念であり、これにもとづいて神が延長を見るところの永遠の観念であり、これにもとづいて神が延長を作った

原型的の観念であり、無限にある諸々の可能的世界の観念である。⁽⁵²⁾といわれうる。延長の観念は「一つ」の観念であり、創造の根源たることが知れた。事実、マルブランシュは、延長を「創造された延長」といつているように、逆にまた、延長の観念のことを「創造されざる観念」(l'idée incréée)⁽⁵³⁾又は「創造された延長の観念」(l'idée de l'étendue créée)⁽⁵⁴⁾といっている。このように、神は、延長の観念にもとづいて、「諸物体を作った(formé)⁽⁵⁵⁾」のである。以上のことと、マルブランシュがよく、神を「普遍的存在」(l'être universel)⁽⁵⁶⁾とよぶこととは深くかかわるかもしれない。

XII

我々は、ここまできて、延長の観念が、トマスの第一質料のアイデアから単なる思い付きすらえられなかったことを予見しうる。それは、単に「延長」即ち「物質」と「第一質料」とが次元的に全く異なるとか「アイデア」が一種の forma だとかからのみならず、第一に、認識の次元でみても判然とする。延長の観念は、「無限的、必然的、永遠的であり、全ての精神(esprits)及び神自身に共通である。⁽⁵⁷⁾」しかし、第一質料のアイデアは、アイデアを large⁽⁵⁸⁾につまり類似(similitudo)又は観念(ratio)ととるときだけ独自のアイデアとして「神内に存在」し、勿論「神のみの認識対象」である。この二点で、一見両者は共通しているが、全く異なる。というのも、トマスは、叡知的対象の知的直観のごときを我々地上の人間には認めないからである。勿論、マルブランシュも、一切を神においてみるためには、或る意味で神を見ることになるが、決してモーゼのような仕方での世で神を見ることはできぬとことわ⁽⁵⁹⁾っている。諸感覚たる闇にかこまれている我々も、本当は、延長の観念たる、物体的事物によって分有されうる限りでの神の本質⁽⁶⁰⁾を容易に見ているのだとするのである。

さて、第二に、創造の次元でも両者の相違は、はっきりしている。トマスの『真理論』第3問第5項においていわれるように、ただ一つのアイデア即ち質料と形相とからなる複合的なもの全体(compositum totum)に対応するアイデアのみが神のうちにある。つまり proprie にいわれた場合のアイデアいわゆる「範型」(exemplar)たる限りのアイデア、「生成の根源」としてのアイデアの資格は、「第一質料のアイデア」にはないのである。その意味で延長の観念と全く異なり、延長の観念は、むしろ複

合的なもの全体のアイデア、従ってまた「個物のアイデア」にその「地位」⁽⁶¹⁾においては対応するのである。それゆえ、かの Ollé-Laprune も、「聖トマスにも、聖アウグスティヌスにも、プロチノスにも、プラトンにも、観知的延長に類似するものはない。これは、プラトン哲学を奉ずるカルテジアンのみがもつことのできる着想⁽⁶²⁾である。」と言っているのである。

さて、我々は、今後の課題として、マルブランシュの書齋に溢れていたというヘレニズム思想とりわけフィロンや、トマスの天使の物体的事物の認識及び人間の認識⁽⁶³⁾例えば『スンマ』第一部第85問第1項等々についても、又曲解されているが、アウグスティヌスをも、延長の観念解明に役立てるべきである。ただマルブランシュの極端な物心分離や、生得観念を Vision en Dieu に置換したこと、「延長」を神の創造とすること、認識の唯一の対象たる延長の観念の提出等も、実は、当時台頭してきたキリスト教を脅かす恐ろしい思想、即ち脳及び脳の筋肉が思惟し判断とする自由思想を奉ずるやから (Libertins) に対する死に物狂いの戦いであり、この細菌及び新自然学に対してキリスト教を免疫にしておくためだったのである。

註

- (1) VIII-IX p. 951 (A. Robinet 編になる *Oeuvres Complètes de Malebranche*, Vrin 1958—67) 以後ローマ数字はこの全集の巻数を示す。VI-VII, VIII-IXなどは合併巻を示す。
- (2) *ibid.*, p. 952 etc.
- (3) III p. 153.
- (4) XII-XIII p. 409.
- (5) Laporte の Brunschvicg 批判はこの点を指摘する。(cf. J. Laporte, *L'étendue intelligible selon Malebranche*, 1938 p. 26~29.)
- (6) cf. VI-VII p. 224 (cf. Bridet, *La Théorie de la connaissance dans la philosophie de Malebranche* 1929 p. 281.)
- (7) *ibid.*, p. 111.
- (8) cf. H. Gouhier, *La philosophie de Malebranche*, 1948, p. 382.
- (9) I p. 42. 第四版以降で削られた。
- (10) Recherche de la vérité の III の 2 及び Eclaircissement において。
- (11) I p. 437.

- (12) *op. cit.* Gouhier p. 385.
- (13) III p. 153.
- (14) VI-VII p. 61.
- (15) cf. V. Delbos, *Étude de la philosophie de Malebranche* 1924, p. 140.
- (16) VI-VII p. 124.
- (17) *ibid.*, p. 105.
- (18) L. Ollé-Laprune, *Malebranche*, 1870, Tome I. p. 172. 以下 O. -L. と略す。
- (19) XII-XIII p. 47.
- (20) *ibid.*, p. 407.
- (21) cf. XII-XIII p. 408.
- (22) VI-VII p. 288.
- (23) *ibid.*, p. 78, 又は pp. 120—126.
- (24) cf. III pp. 151—152 連続創造が入ってくる。
- (25) affecter を触発, toucher を抵触, frapper を触突と訳しておく。
- (26) cf. XII-XIII p. 408.
- (27) VIII-IX p. 1030.
- (28) A. Arnauld, *Des Vraies et des Fausses idées contre ce qu'enseigne l'auteur de la Recherche de la Vérité*, Abraham Viret p. 18f., 及び p. 30ff. 以下 V. F. I. と略す。
- (29) V. F. I. p. 38f.
- (30) *ibid.*
- (31) V. F. I. の至る所で, アルノーの主張する「真観念」(vraies idées) に対して, マルブランシュの「観念」を示している。
- (32) VIII-IX p. 908.
- (33) XII-XIII p. 42.
- (34) *ibid.*
- (35) VIII-IX p. 1066.
- (36) *ibid.*, p. 904.
- (37) *ibid.*, p. 905.
- (38) アルノーとの書簡で, アルノーの死後5年目にマルブランシュから差し出されたことになっているので有名。相手が死んでいないのでマルブランシュが思い切って真意を打ち出しているのできわめて貴重である。正確な表題は『「第三の手紙」へのオラトリオ修道会司祭マルブランシュ師の解答』, 1699.
- (39) VIII-IX p. 907, p. 910.

- (40) *ibid.*, p. 910.
- (41) *ibid.*
- (42) *ibid.*
- (43) V p. 29.
- (44) V. F. I. p. 137. これに対するマルブランシュの答えは、延長の観念は、この物体界（自然）の仕方では延長しているのではない。ひきかえるようになるように定められている観知的ひきかえるが、神内にあるのではない等々と答えている。神の質料化の問題がトマスにあるのか詳かではないが、神の可能態化の問題がトマスにあるようである。cf. *De Veritate*, Q3 a 5 ad 2.
- (45) *Spinoza opera* II, p. 56. (propositio III etc.) p. 86, p. 87, p. 126 (*De naturā rationis est……aeternitatis specie percipere*) 等々。
- (46) X p. 101.
- (47) cf. VI-VII p. 105.
- (48) cf. *ibid.*, p. 61.
- (49) I p. 90.
- (50) VIII-IX p. 1066. cf. *De Veritate*, Q 3, a 2, c.
- (51) O. -L. p. 199.
- (52) VI-VII p. 213—4.
- (53) III p. 151—2.
- (54) VIII—IX p. 942. (cf. p. 951)
- (55) VI-VII p. 112.
- (56) III p. 148. cf. p. 152.
- (57) VIII-IX p. 1066. cf. XVII-I p. 284.
- (58) cf. *De Veritate*, Q 3, a 5.
- (59) cf. III. p. 158.
- (60) cf. p. 97., p. 1066. トマスの『スンマ』の第一部第14問15問を参照するようにマルブランシュは指示している。
- (61) cf. *De Veritate*, Q 3 a 8
- (62) O, -L. p. 200.
- (63) *S.T.* I. Q 47, a 1, Q 55, 56, 57 etc.